

大町桂月の多才

芸術と酒と自然美

大町桂月（1869-1925）は、有名な旅行記・随筆作家で、才能ある詩人、書家、スケッチ画家、作詞家でもありました。数多い趣味の中には、道なき道に行くことと、大量の酒を飲むことも含まれました。彼は 1908 年に大衆雑誌の取材で初めて蔦を訪れ、その孤立した場所柄と壮大な自然の風景、そして滞在した温泉旅館の若い経営者夫婦のもてなしの魅力に夢中になりました。彼の熱烈な蔦および十和田地域についての記述と、彼が書きたいいくつかの歌は、この知られざる地域を日本中に紹介することとなりました。

この地に根を下ろす

大町は頻繁に蔦を訪ね、旅館の主たちのために書いたスケッチや句を宿代として旅館に長期滞在しました。彼は 2 度も厳寒の冬を通して滞在し、周囲を驚かせました。やがて、彼は蔦に根を下ろすことを決め、1925 年にここを公式の住所としました。彼は、仏堂建設の際に出た材木を見つけ、近くに仕事場を建て始めました。残念なことに、大町はその完成を待たずして 1925 年 6 月 10 日、56 歳で亡くなりました。大町の蔦に対する深い愛情は、この休憩所の裏手にある彼の墓石に刻まれた辞世の句に記念されています：

『極楽に越ゆる峠のひと休み、蔦のいで湯に身をば清めて』

没後の支援

死後でさえ、大町の蔦地域への応援は、この手つかずの自然を後世に残すのを助けました。彼が 1923 年に書いた（蔦の森を含む）十和田地域を国立公園にして欲しいという請願書は、1936 年に十和田国立公園が設置されるのに一役買うこととなりました。1956 年、八幡平地域が指定範囲に加えられ、名称は十和田八幡平国立公園に変えられました。